

母の日



「お前どっち似？」友とのたわいもない会話の中受けた問いに、思わず母親の顔を思い浮かべようとしたもののまともに描ききれない。先々週上京してきて会ったばかりにもかかわらずだ。唯一はつきりと浮かぶは、十数年以上も前の顔だった。

あの年の母の日、私は初めて家で料理を作り、母にふるまうことにした。丁度学校の授業でミートソースを習ったばかりだったので、それを家で再現したらほめてくれるだろうと目論んだのだ。ところが直前、学校の道中にあったスパゲッティ屋の看板に「当店一番人気、クリームパスタ」という一文をたまたま目にし、欲が出てメニューを変更、本屋で料理本を立ち読みし、ぶっつけ本番で「クリームパスタ」に挑むことにした。調理実習は、数名一組で作業分担しながらすすめ自分でやらない作業も多い。しかも今回は初挑戦の料理。簡単に考えていたものの、日頃料理などしない自分には易くなく、相当に手こずりなんとか形にしたものの、今思えば、まるで見栄えのしない乱雑な盛り付けの大味の一皿であった。

しかし母は、「いただきます」と一口食べると、「うん、おいしい。」と笑った。そして、「おいしいよ」をときどき繰り返しながら、ちゃんとすべてたいらげ、「ありがとう、おいしかった。ごちそうさまでした。」と礼を言って締めた。

考えてみると、あとにも先にも、あれだけまじまじと母の顔を気にして見つめたことはない。終始笑顔で、あんなふうには喜ばせてあげたこともあれ以来ないような気さえする。確かに味は「美味」に程遠いものだったが、母を喜ばせたい一心で作ったということは、自分でも評価してあげたいところだ。思えば、年中台所に立つ母は、その度合の強弱は別にしても、たいてい家族を思い食事づくりをしてきたに違いない。あの日は、母の日々の大変さが偲ばれ、これからは母に日々感謝しようと思わされたはずだった。それもいつのまにか忘れていた…。ひとり暮らしで少しは上がった料理の腕。今度、母に何か作ってあげようか。母の顔の記憶を刷新するためにも。